

花よりも人こそあだになりにつれを先に戀ひむとか見し

(釋)植ゑける人 望行が家族にても、召仕にてもあるべし。伊勢物語には、「昔男、友だちの、人を失へるが許にやりける」と詞書ありて、この歌を擧げたり。

一首の意は、櫻の花は、もろく散るはかない物なるが、今その花が咲く時分に、それよりも先に、植ゑたりし人がサ、はかなくなつて去まうたワイ、かねては、花と人とは、どちらが先へ仇になつて、戀ひ焦れうとサ思つたことか、勿論花を先にと思つたに、さて意外なる事よとなり。

(評)不定なる人の命、無常なる世の中を、花と人とを對比して説明したり。見しは、思ひしといふべきを、花の方につきて轉義したるなり。下句、洗煉の語にして、措辭婉微なり。

あるじ身まかりにける人の家の梅の花を見てよめる

貫之

色も香もむかしのこさに匂へども植ゑけむ人の影ぞこひしき

(釋)詞書、家集には「あるじ失せたる家に、櫻を見てよめる」とあり。

○こさ 濃さなり。○匂へども 匂ふは、色には光澤あるにいひ、香には芬芳の高きにいふ。一首の意は、この梅の花を見れば、色も香も、昔の通りの濃さに變らず、美しく咲いて、よく香ふけれども、花の賞翫はさし置かれて、これを賞翫すべく植ゑたであらう、昔の人の亡き面影が

サ、戀しいワイとなり。

(評)色もと云へるによれば、紅梅あり。古へは、軒近く植ゑられて、櫻にもまさるまにめでられたりき。家集の詞書に「櫻を見て」とあるは、これを心得かねたる者のさかしらあるべし。想は、やゝ理路に涉れり。

二句、顯本、及び、六帖に、昔にこさずとあるは、こごわりたす。

河原の左のおほいまうち君のみまかりて後、かの家にまかりてありけるに、鹽竈といふところのさまをつくれりけるを見てよめる、

君まさでけぶり絶えにし鹽竈のうらさびしくも見え渡るかな

(釋)鹽竈といふところのさまをば、融公の河原院中に、陸前國千賀の鹽竈の浦(今の松島灣)の景を摸しつくれるをいふ。毎月、難波の潮二十斛を汲まして、鹽を焼かしめられきとぞ。續古事談に「河原院は、融左大臣の家なり。臺閣水石、風流をつくして、作りみがきて住み給ひけり。失せ給ひて後、その子、法皇に奉りて、時々渡り給ひけり。云々。その後、佛寺になりにけり。云々」と見え、山城名勝圖會に「今按、舊跡、自六條坊門至六條、自萬里小路至三京極、此内淨徳寺鎮守、曰融公靈社、又、有稱鹽竈町一所」とあり。○まさで 座さすしてなり。

○菰菴のうらさびしく、菰菴の浦寂しく、心寂しくを寄せたり。

一首の意は、融君が御座なさらずして、その節から、菰も焼かねば、烟の絶えてままひしこのお邸の菰菴の浦は物寂びて、一方から心寂しうまわ、見渡さるゝ事よとなり。

(評)この好個の詩題に對して、感興何ぞ淺薄なる。源順の如きは、長篇を賦して、その荒廢の跡を歌ひしにあらずや。わづかに、菰菴のうらさびしくの秀句、豈にいふに足らむや。初句、六帖、朗詠、卅六人撰等に、君なくとあり。

藤はらのとしもとの朝臣の、右近中將にて住み侍りけるさうしの、身まかりて後、人も住まずなりにけるに、秋の夜ふけて、物よりまうできけるついでに見入れれば、もごありしせんざい、いごあげく荒れたりけるを見て、はやくそこに侍りければ、昔を思ひやりて、よみける、

みはるのありすけ

君がうるしひとむら薄虫のねのあげき野邊ごもなりにける哉

(釋)詞書は、藤原利基が、右近衛の中將の時、住まれたりける曹司（曹司）の、利基の薨後、住む人も無くてありたるに、作者有輔が、秋の深夜、除所よりの歸途、邸内を窺へば、もごありし前裁（前裁）の甚

しく荒蕪歸にしたるを見て、以前作者は、其處に家人として居りたる事あるによりて、昔を思ひ出して詠めるとなり。利基は、贈太政大臣良門の子、内大臣高藤の兄にして、堤中納言兼輔の父なり。曹司は部屋、前裁は庭前の植込なり。○ひとむら薄一叢薄なり。一首の意は、貴方が植ゑて置かれたる、わづか一叢の薄が、何時の間にか茂つて、虫の音のまげく聞ゆる野原のやうにまあ、意外にもなつてままうた事よごあり。

(評)虫のねの喧しきをまげきと轉義したるに、おのづから一叢薄の、繁く生ひ延びたる光景の聯想せられて、面白し。元來前裁の草木荒れたりして、何ばかりの事もあらぬを、野べごもなりにける哉と誇張せるは、これ一叢薄との對映上、甚しき變化、いみじき荒廢の跡を想見せまむる手段なり。作者は、延喜年中に、左衛門の權少志に任せられしこと見ゆれば、もごより武人の出身なるべし。利基在世の砌は、右中將なれば、想ふに、隨身などにて、利基の家に出入せしにや、蒼涼凄酸、體調またよく、この趣に協ひて、完作と稱すべし。

惟喬のみこの父の侍りけむ時によめりけむ歌どもとこひければ、かきとおくりける奥に、よみてかけりける、

ともものり

ことならば言の葉さへも消えななむ見れば涙のたきまさりけり

(釋)歌どもとこひければは、歌ども見せよと請ひけるなり。友則の父は、有友として、貫之の父なる皇

行の弟なり。一家悉く歌に名ありて、有友も、集中に二首を數へたり。されば、惟喬親王の、遺稿を見せよと請はれしも、故あり。○ことならば 春上「ことならば咲かずやはあらぬの條に釋けり。○なむ 希望の辭。○たき 四段活の語にて、取上ぐ、搔上ぐなどいふ意。

一首の意は、我が親は、とても死なれたる位ならば、詠み置かれたる歌までも、一所に消え失せて貰ひたかつたワイ、その故は、あまなか形見の歌などが、目にかゝれば、一しほ思ひ出されて、いよ／＼悲しく、落つる涙が抑へきれなくなつて來るワイとなり。

(評)大事もてはやすべき形見を、むしろ消え失せむと希へるが、この一ふしならむも、類想多かるうへに、措辭平凡なり。

題あらす

よみ人あらす

なき人のやごにかよはば時鳥かけてねにのみなくと告げなむ

(釋)○なき人のやごにかよはば 時鳥を冥途の鳥といひ倣すに本づきて云へり。本説は、十王經に「一切衆生臨命終時、閻羅法王遣羅卒、(中略)縛三魂、至門關樹下、樹有三荆棘、宛如三録及二鳥栖掌、一名無常鳥、二名抜目鳥、我汝舊里化成三鸚鵡、示怪語一鳴別都頓宜壽云々」ごあるに據れるにて、玉篇に「鸚鵡鳥、今之郭公」とあり。但、十王經は偽經にして、郭公の事は、かの蜀魄の故事に附會して、更に敷衍せしものなるべし。其の古き偽作なるが爲に、夙くより、典據として詠作せる詩歌ごも多かり。○なき人 世に亡き人なり。

一首の意は、時鳥は、この世に亡き人の所へ通ふ鳥といふ事であるが、果して通ふ事ならば、これ時鳥よ、自分が、亡き人の事を、不斷心にかけて、聲に出して泣いてばかり居ると、あちらへ知らせて貰ひたいワイとなり。

(評)伊勢集に、

死出の山こえてや來つる時鳥こひしき人のうへ語らなむ

と、描寫を反對にえたるまでにして、著想は同一なり。當時に弘通せし佛教思想の結果として味ふ時は、また特種の趣味あり。

○

たれ見よご花咲けるらむ白雲のたつ野と早くなりにしものを

(釋)一首の意は、この宿の花は、誰れに見てくれよと云うて、このやうに、昔に變らず咲いてある事であらう、主人は死に、家は荒れて、早もう、白雲の立つほどの、里遠い野原となつてまゝうたものをサとあり。

(評)白雲のたつは、野の修飾なり。軽く見るべし。重くする時は、現前に、雲の立昇ること聞えて、この景致に慳はず。眞淵が、火葬の烟に寄せたりと云へるも、おなじ謬見より出でたる牽強なり。無情の花を、有情のわれに對へ、有爲轉變の迹を、不斷の花に對へたり。

式部卿のみこ、閑院の五のみこに住みわたりけるを、いづば

くもあらず女みこのみまかりにける時に、かのみこの住みける帳のかたびらの紐にふみをゆひつけたりけるをとりて見れば、昔の手にて、この歌をなむかきつけたりける。

かずくにわれをわすれぬ物ならば山の霞をあはれこは見よ

(釋)式部卿のみこは、宇多帝の皇子敦慶親王にて、玉光宮と稱せられ、好色無双の美男に物し給ひしこそ。閑院の五のみこは、誰れとも定かならず。帳のかたびらは、御帳臺に懸けたる帳の布帛なり。帷をかたびらと訓む。紐は飾のなるべし。昔の手とは、故人の筆といふことにて、閑院の女五のみこの筆跡なり。

一首の意は、若し在世の砌に變らず、何につけかにつけ、私の事を御忘れ下されぬ物ならば、山へ立ちます霞を、何卒、あはれいとしやと思召して、御覽じて下さりませ、山の霞は、私が烟になりましたる跡のゆかりで御座りまする程にござり。

(評)大空の霞に紛ふ北邙一片の烟となりて、萬事こゝに休せむとす。わが亡き後に於ける好色無双の玉光の宮に、山の霞をあはれと見るばかりの、些の人情あらむことを希へる、衷情哀ならずやは。

をここのひこの國にまかりけるまに、女にはかにやまひを

あて、いと弱くなりける時、よみおきて、みまかりける、

よみ人あらず

聲をだにさかて別るゝたまよりもなき床に寝む君ぞかなしき

(釋)ひこの國は、例の他國の意。まかりけるは、萬治本、まかれりけるとあり。○たま 魂魄なり。

○なき床 妻の無き床なり。

一首の意は、貴方が、他國に御出の爲、御姿はさておき、御聲をさへもえ聞かずに、死に別るゝ、誠に残念に悲しい私の魂よりも、追付け京へ御歸なされて、私が居らぬ跡の床に、獨御休みなさるであらうと思ふ貴方が、御いとしいワイとなり。

(評)靈魂の存在を認むることは、古代宗教皆然り。神儒佛耶、その歸を同じくす。さて、生別にかさぬるに、この死別を以てす。境遇、既に、他の同情を惹くに充分なり。況や、わが身の悲を傍にして、偏に夫の、孤燄依る所なき悲境に沈淪せむことを豫想して、惻阻の情に堪へざる、これ實に、人情美の極處を發揮せしものと稱すべきか。死ぬるわれよりもといふべきを、別るゝ魂よりもと轉義したるが、いよゝはかなげに聞えて、身を亡き物にまたる口吻、哀なり。結局、悲しきは、露骨の嫌あり、くちをし。

三句、六帖に、われよりもとある、劣れり。四句も、同書に、人を悲しきとあり。

やまひに煩ひ侍りける秋心地たのもしげなくおぼえけれ

ば、よみて、人のもこに遣しける、

大江千里

(七八四)

もみち葉を風にまかせて見るよりもはかなき物は命なりけり

(釋)心地たのもしげなくは、快癒の覺束なきをいふなり。

一首の意は、もみちの葉を、風に心任せに吹かせて見るは、何時散るかも知れぬ、頼み少ないはかない物であるが、それよりも優つて、頼み少ないはかき物は、私の命であつたワイとなり。

(評)佛數に所謂、飛花落葉の聲聞觀に似たり。但、今散るをいへるにはあらず。風前の燈など趣にて、今や散らむと、覺束なく思はるゝはかなさをたくらべたるなり。

身まかりなむとてよめる

藤原これもこ

露をなごあだなる物と思ひけむわが身も草におかぬばかりを

(釋)○ばかりを ばかりなるものをの意。

一首の意は、日頃草の葉に置く露を、はかなく消ゆる、頼み少ない物ぞとは、何故に思つたのであらう、今かう病み勞れて、何時死ぬかも知れぬ、頼み少ない事を思ひまはせば、自分の身も、草の葉に置かぬと云ふばかりであるものをサとなり。

(評)この種の觀想、漢書の蘇武傳に、「人生如朝露」、又、文選の古詩に「年命如朝露」と見え、金剛

經の六喻に「如露亦如電」、南本涅槃經に「是壽命(中略)亦如朝露、勢不久停」と見えたる、支那印度を通じて、全く同一軌に出づ。さては、作者の新案にあらず。只わが身も露と殊ならぬものをなど、凡手はいふべきを、露のよすがに、草に置かぬばかりを、と云へるが、婉曲にして、奇妙なるなり、上句のなどの疑問も、姿致あり。相俟ちて完作となれり。

やまひしてよわくなりける時よめる

なりひらの朝臣

つひに行く道とはかねて聞きしかご昨日けふとは思はざりしを

(釋)一首の意は、死の道は、誰れも何時ぞは、是非に行く道ぞといふことは、かね／＼聞いて居りたれども、それが、昨日や今日の事とは思はなかつたものを、早その時節が來て、行かねばならぬ事かまあとなり。

(評)佛語にも、有待の身など、専らいひ觸れたれば、豫て聞きしとは云へるならむ。死ぬることを遂に行く道といひ做したる、措辭婉曲を極む。きのふけふは、昨日は知れざしかば、取出でていふまじく、道理のうへよりは、けふあすとはいふべきなれども、抑も、こは只、詞のあやにして、この頃とは思はざりしをの意を、具体的に轉義したるに止まれば、更に差支なし。况や、けふあすといひては、四句詞さゝのはず。却て、昨日といひ副へたるに、いたく末期のさし追れる趣さへ躍如として、感深し。流石に一代の才人が最後の囁吐、刻せず割せず、偶爾こ

(七八五)

れを得、おのづから絶調を成せり。自然の聲なり。誠心の響なり。純乎たる天籁、仰ぐべく、まねぶべからず。

(七八六)

かひの國にあひありて侍りける人こぶらはむとて、まかりける道なかにて、にはかに病をして、いまくとなりにつれば、よみて、京にもてまかりて、母に見せよといひて、人につけ侍りける歌、
ありはらのあげはる

かりそめのゆきかひちこそ思ひこし今は限のかごでなりけり

(釋)道なかにて云々 甲斐に居る知人を訪はむとて下りける途中にて、急に煩ひ付きて、臨終の期になれるより、この歌を詠みて、京に持ち歸りて、母に見せよとて、人に託したるなり。滋春は、業平の次男にて、母は右大臣藤原良相公の女、染殿内侍なり。この詞書、一本には、「甲斐の國にまかりて、身まかりける時よめる」とあり。○ゆきかひち 往反の道といふを、甲斐路に寄せたり。

一首の意は、甲斐の國へ行くこの旅を、つい一寸したる往き來の道とサ思うて、出て來ましたワイ、然るに、只今となりては、これが、この世の門出で御座りましたワイとなり。

(評)さて、かゝらむとは思ひ掛けざりし事よの餘意あり。他國他郷に流寓して、他人の手に死せ

むとす。かの故郷なる慈母の膝下、先づ慕はれて、假初の門出の、死別の門出となれることを悔しみ、遙に永訣の情を叙ぶ。事態、頗る悲惨といふべし。措辭、猶一層の洗煉を要すべきか、甲斐路の秀句の如きは、抑も末なり。大和物語に、

この在次君、在中將の、東に往きたるけにあらむ、この子どもも、人の國通ひをなむしける。心ある者にて、人の國の、哀に心細き所々にては、歌よみて書付けなどなむしける。(中略)かくて、人の國ありきく、甲斐の國に到りて住みける程に、病して死ぬとて詠みたりける、(歌あり、本文のと同じ。)

と見えたり。事情、大方差はずやありけむ。

明治三十九年九月十二日印刷
明治三十九年九月十五日發行

●全五册●五卷近刊●
定價 一、二各四拾錢
三、四各四拾五錢



不許複製

著者

金子元臣

東京市本郷區弓町一丁目十二番地

發行者

三樹平

東京市神田區錦町一丁目十番地

印刷者

宮本敦

東京市神田區雉子町三十四番地

印刷所

宮本印刷所

東京市神田區雉子町三十四番地

發行所

東京市神田區錦町一丁目
長電話本局二四三八番

明治書院

187
159

金子元臣先生著述

歌

がたり
定價金三拾五錢郵稅四錢

本書は、歌學に熱心なる著者が、廣く群書を濳覽して、その深遠なる學識と精緻なる觀察とによりて、最も有益にして興味ある、古人の歌辭上に於ける苦心、透悟等を捉へ來りて、著者獨特の奇警なる評論を加へ、あるは古今の歌壇に上下し、東西の詩界に縱横して、比較論評を試みたるもの、歌學研究者の机上缺く可からざる珍本なり。

新撰

柿本人麿歌集
定價金二拾五錢郵稅四錢

歌聖人麿朝臣の歌集として完全なるものなきは世の久しく遺憾とする所也。著者深く之を慨き茲に本書を公にせらる。即ち萬葉集以下の諸書を濳覽して天集には、正確なる歌聖の所作を收め、地集には、それによらざるもの、或るは、人集には、眞偽不明の者を採録したれば、苟も、歌聖の作として、一に此書に流るゝもの無し。況や、附録として、古人の歌聖觀、及び、梅谷直文先生の傳せられたる、人麿朝臣事蹟の一篇を收めれば、錦上に花を添へたり。

百人一首評釋
定價金二拾五錢郵稅四錢

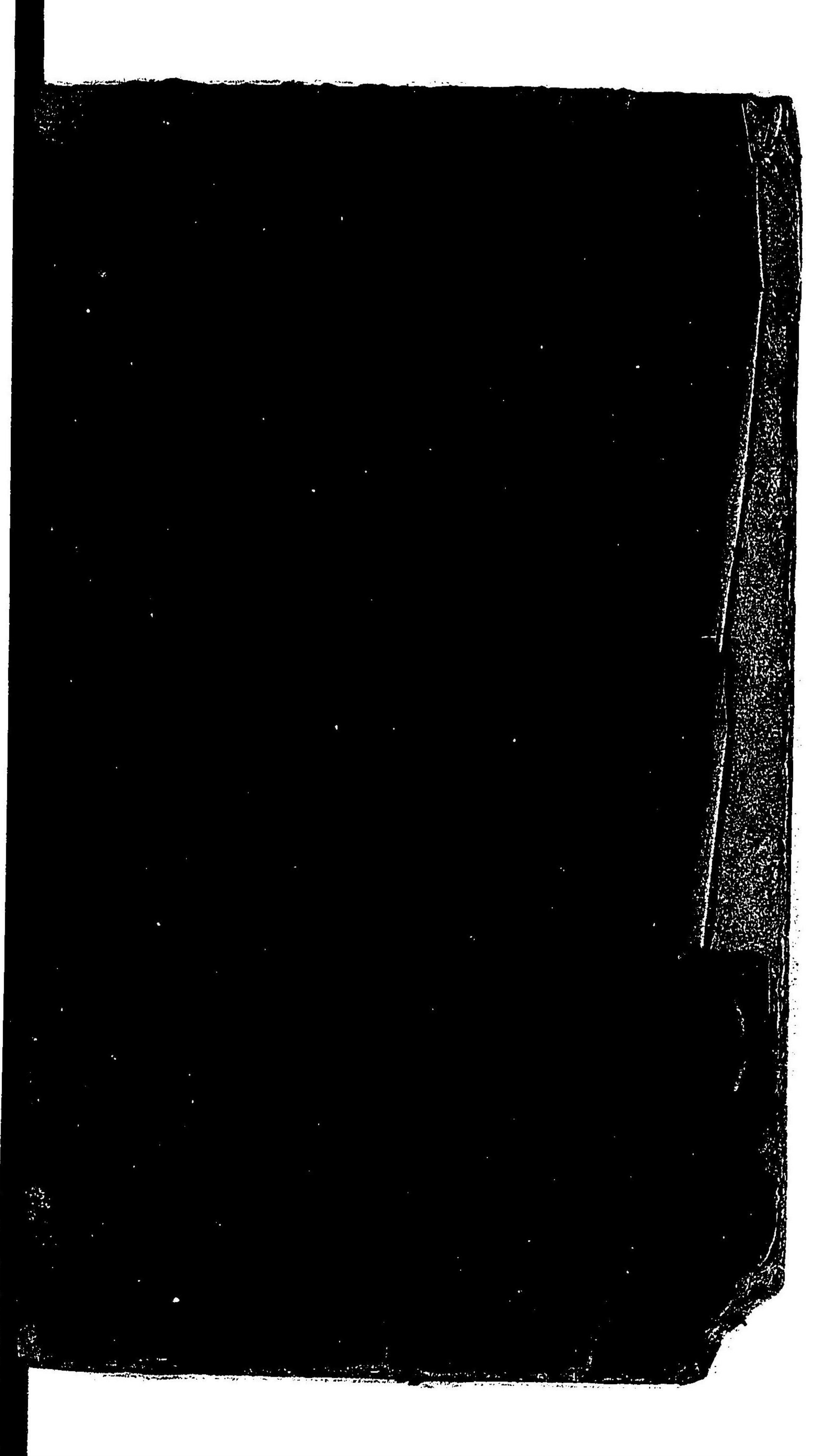
各首につき丁寧な意義の解釋を下し、最も真正に之を評論したるもの也。猶、百人一首の來歴、著者、風体、作者等につき、詳細なる説明を下し、古來の誤見を打破したり。百人一首の註釋書世に多しと雖も、本書の如く、正確にして親切なるは、また他に求む可からず。

古今歌文書綱要
定價金五拾錢郵稅六錢

古來國文・國歌に關する書籍の世に出でたる者、汗牛充棟も書からず、之を研究せむとする者、其よる所に苦む。著者之を慨歎して、此書あり、乃ち太極を示し、綱目を分ち、年序によりて書目を掲げ、一々先づ内容の梗概を分指し、次に其註釋書の原を列舉して、古今二千年間の歌文書を指したれば、一日のうちに、古今二千年間の歌文書を讀むべし、尤も、其註釋書の原を列挙し、古今二千年間の歌文書を讀むべし、尤も、其註釋書の原を列挙し、古今二千年間の歌文書を讀むべし。

東京明治書院發行

187
159



187
159

Vertical text on the left side of the book cover, possibly a title or author name, rendered in a highly textured, high-contrast style.

Handwritten marks or characters at the bottom of the left side of the book cover.